

---

# 罰ゲーム

相楽まゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罰ゲーム

【Zコード】

Z9040D

【作者名】

相楽まゆみ

【あらすじ】

黒の組織壊滅後、解毒剤の開発により無事蘭たちと共に二十歳になれた新一。同じ屋根の下、アメリカに行つた博士のかわりに、解毒剤を飲まずそのまま成長して中学生になつた哀の保護者を務めている。哀の新一を想う気持ちが募るなか、彼がいきなり罰ゲームつきでババ抜きをやううと言い出して…?

## 1・彼の命令は……？（前書き）

最初の部分に少し1-2禁要素が含まれています。直接的ではありませんが、少しでも嫌だ、という人は閲覧をお控え下さった方がいいかもしれません。カツプリングは新一×哀です。

## 1・彼の命令は……？

「灰原、力抜け」

「……いやよ」

「ほら、楽になるぜ？」

「あ……ダメッ……」

薄暗がりの中、私たちは彼のベッドの上で《ばばぬき》をしていた。

\* 費ゲーム\*

「灰原一、暇だろ？トランプやるうぜ」

突然、私の部屋に現れた工藤君にそう誘われたのはついさっきのこと。

今から4年前。少年探偵団やまわりの理解者との協力で黒の組織を解散させ、私はアポトキシンの対抗薬として成長促成薬を完成させた。それを工藤君に服用させ、見事に彼は蘭さんたちと同じ、20歳に戻ることができたのだ。

しかし私はもう《宮野》には戻りたくなかった。それはお姉ちゃん

んや、家族との再結を拒む行為なのかもしれない。罪を犯した自分への戒めと説いた、現実からの逃避かもしない。

それでも、工藤君はいいと言つてくれた。発明が大当たりして、急遽アメリカへ留学しなければならなくなつた博士のかわりに、保護者を務めると言つて、ずっと私のそばにいてくれた。

そんな彼に抱いていた恋心に、気づいたのはいつだらう。

しかし彼は大学院に通いながら探偵業を始めて、今とても忙しい。なのに時間が合えば、こうして一緒にいようとしていてくれる。それだけで充分じゃないか。これ以上、彼を煩わせてはいけない。

しかも、自分が薬を開発するのが遅くなつたせいで、工藤君への諦めがついた蘭さんは新出先生と関係を作ってしまい、先日とうとう式をあげた。

それを笑顔で祝福していた彼が、部屋で涙をこぼしていたことを、哀は知つている。

だから私のこの思いは、心の奥深くに押し込めて、重圧をかけて、一度と上がつてこないよつにと私は鎖を巻いた。

灰原哀として、工藤新一のこととして、同じ屋根の下で暮らすだけの、保護者と被保護者の関係を守り抜こうと決めた。

「悪いけど忙しいの。日本の中学生つて結構大変なんだから。」

特にこれといった用はないけれど、哀は今の《微生物における様

々な水中環境での生存率》の研究を早くまとめて、次の《人類遺伝子研究》を始めたいと思っている。

アポトキシンの対抗薬を作ったからといって哀の科学者魂は衰えることもなく、新一が探偵事務所とおいでいる阿笠邸の地下室で、週1、2のペースで研究に籠もつていた。

しかし今度の理由はそれだけでなく、新一の身体を気遣つてのもある。せっかく早く帰つてこられたのだから、たまにはゆっくり休んで欲しい。

「いいじゃねえか。今大学でトランプ使つた確率の研究してさ。みんなとトランプで遊んでたらハマつちまつて！」

子供みたいな、明るい笑顔。探偵をしている時の真剣な表情。このギャップも、哀は好きだと思った。

「……」

「ばばぬきやうーぜ。罰ゲームつけて」

「罰ゲーム？」

そう、と彼は笑う。

「負けた方は、勝つた方の言つこと聞くんだ。」

「…面白そうね。後で泣いたって知らないわよ？」

ついたついたつき、煩わせないと自制したばかりなのは分かつていて、

あまりに美味しいからかに、少しへりこなり…と心を無理矢理納得させる。

「よし、じゃあ決まりだ。ジュース持つてくれるから、俺の部屋にあるトランプ切りながら待つて」

「分かったわ」

罰ゲームは何にしよう…とあれこれ考えながら、彼のベッドに腰掛けでトランプを切っていた。

「クソキーもあつたから持ってきた」

しばらくして、それを一口ごく呑みながら足でドアを開けて彼が入ってくる。

「やめて、じゃあやつか

お盆をサイドテーブルに置いて、彼もベッドに座る。トランプを配り、揃ったカードを抜くと、かなり少ない数になってしまった。

「……一人でばばぬきつてやるのは失敗だと悟つただけれど」

「だつて、ばばぬき面白こじさん」

「ハア…」

「ほら、じゃんけん…チヨキーつあ、負けた！」

じゃあ私からね、と一人ショックを受けている彼をよそに、哀は

カードを引く。

「3」

揃つたわよ、とカードを真ん中に捨て、クッキーの方に片手をのばした。

「くつわう……おっしゃ！ 7だ！」

彼もクッキーをまた頬張る。

これと同じようなことが何度も繰り返された後、とうとう上藤君が一枚、私がジョーカーを持って2枚になった。

私が持つカードのどちらかは Baba。彼の目は真剣だ。

ふつうの Baba 抜きなら私もここまで入り込みはしない。負けそうになつたらさつさとそれを認めて負け、早く終わらせようとする。

しかし、今度のは罰ゲーム付きなのだ。自分が勝てば好きなようにできる反面、負ければ彼の好きにされてしまう。今は彼を思う気持ちについては関係なく、長年を一緒に（だいたいは有利な立場で）過ごしてきた彼に負けるのが癪という所だった。

「……」

「わあどうち？ 探偵さん。」

しばらぐのどを唸らせて考えていた彼が選んだのは、ばばではない方、ハートの12。

「これを取られたら負ける……！」

ふと脳裏をよぎつただけの考えはいつのまにか指先に伝わり、そのトランプを彼が引けないほどに強くつかんでいた。

「……おー」

「……」

「灰原、力抜け」

「……いやよ」

「ほら、楽になるぜ？」

もう言つて彼はトランプを強く引っ張る。

「あ……ダメっ！」

私もそれに対して強く引き戻す。

「往生際の悪いやつめ。ほらッ」

「えッ……わ、ちょっとなー」

トランプが散らばったベッドの上を、腕に引き寄せられて彼の身体に倒れ込む。

「ちよつといつたい何のつもじ……」

目がとじられた彼の顔が田の前に迫ってきて、急なJリード驚愕して体が動かなかつた私に唇を寄せた。

「ひょっと……上藤君? 何したの……?」

「俺の勝ち」

「……は?」

「ほれ

彼の手が持つてゐるのはハートの1-2。仄めば私の手にはジヨーカーしかなくつて。

「ちやんと俺の言つこときみかよ?」

彼は卑怯だ。私のこの思いもせらうで。私が心を揺らしたキスも、彼にひとつは勝つための手段でしかないのだ。

もちろん、そんな思いはみじんも表には出されないけれど。

「で…? 何をすればいいわけ?」

お、わかってるじゃねーか。と言つて意味ありげにこっしゃつと笑う。彼に負けるのが癪だとか、悔しいとか、そういうのはもうなにも思わなくなつていた。どうでもいい。早く終わつて欲しかつた。

「俺が好きだつて言え」



## 1・彼の命令は……？（後書き）

作者が多忙なため、更新が週1程度でしかできません（汗　また、初めての投稿なので少しでもご批評下されると嬉しいです（〃〃）

## 2・想この鏡（前書き）

全体を通して暗めです（・・・・）  
じつぞ根気よくお読み下せー。

## 2・想いの鎖

『俺が好きだって言え』

彼の口が紡いだその言葉。それを理解できない程、私は馬鹿じゃない。

それでも、理解なんてしたくなかった。これほどまでに自分の理解力の高さを呪つたことはない。

私にとって、どれほど残酷かしらないその言葉は、自分で言うのは愚か、彼の口から聞くだけでもつらい。しかし、それを言えと彼は言った。所詮彼は、私の羞恥心をあおるだけの小さな遊びのつもりでいるのだろうが。

私の気持ちも知らないで

それでも、これを表に出すわけにはいかない。感情を表にださないようすに組織で教え込まれてきた私には、このくらい容易いのだけれど。

「好きよ。」

何の感情も込めず、表情も変えず。さらりと言ひ放つたつもりだが、心なしか声がふるえた。

しかしそれに気がつかないでか、この男は言つ。

「おいおい、もうちょっと感情込めようぜー。どうせ冗談なんだか

「いや

彼のその言葉は、冷たい棘となつて私を刺した。

『冗談』？ そんなこと、言わせない。

私の中で何かが弾けた。

「好きよ」

途端、頬に涙が伝わった。彼の呆けたかのような表情を見て、さらにはそれが増す。

「私、工藤君が好きだわ」

鎖が切れた。想いがあふれ出した。もう、とまらない。

「…おい、灰原お前」「ずっと」

彼の言葉を遮つて。

「ずっと好きだった。……駄目だと思つても」

「灰原、もうそれ以上…！」

ベッドに彼を押し倒す。そのまるで驚いたような顔を見て、私の

鎌はあとかたもなくなく消えた。

「貴方も私を好きでしょ?」

もういい

工藤君の驚きに固まつたよつな顔を一瞬ちらりと見て、私は自分の唇を相手のそれに重ねながら囁つた。

静かに流れる涙はそのままに、彼の上から身を退かす。

「お休みなさい」

何も言わず、黙つてゆつくつと体を起こした彼に背を向け、ベッドから降りて部屋を出る。バタンと閉めたドアの向こうから、音は聞こえて来なかつた。

明日は、まるで何も無かつたかのように振る舞おつ。朝ご飯を作つて、歩美ちゃんと学校に行つて、帰つたら地下室に籠もつて、夕飯を作つて。いつもと同じ日常を。

彼がなにか言つたとしても、自分は何も知らないかのようにしなければ。日常を壊してはいけない。私が望んで、彼が与えてくれたこの暖かな毎日を、この手で破壊してはならない。

私も彼も一応は大人だから。このくらいなら出来るはずだから。もう一度と、この思いを表にださないよつこ。

それでも…

駄目だ、また涙があふれてくる。

自室に戻った私は、崩れ落ちるようごベッドに倒れた。

## 2・想いの鎖（後書き）

暗くてすみません にしてもばばぬきの話だつたんですけどね  
え……（汗 ごめんなさいm（ーー）mなんかトランプあんまり  
関係なくなつてしましました。

作者の源となります、感想や「批評」どうかよろしくお願いします！！

### 3・切望（前書き）

すこません、暗いです(ಠ\_ಠ) 更新遅くなりました(汗 その上  
なんか今回の長めのお話です。や、気合ないと根性でおねがいします  
!!

### 3・切望

「……まだ5時じゃない……」

ベッドに倒れ込んでから、昨日はそのまま寝てしまつたようだ。

「フツシ……情けないわね」

一度目が覚めてしまつともう起きるしかない。喪はとりあえず制服に着替え、朝食の準備をした下へ降りていった。

しづめじへじて…

もう出来ちやつたわ、と言ひて喪は嘆息する。トーストと玉玉焼き、サラダにベーコン。

いつもと同じ、簡単な朝ご飯。しかしあまりに簡単すぎでは時間つぶしにならない。

壁に掛かっている時計に目をやるとまだ6時。学校に行く時間まであと2時間もある。

「エリナ、起きて…」

たとえ決心したとはこつても昨日の今日。正直、彼に会つのは躊躇いがあった。

「はあ……地下室、行こ」

彼の分だけ机に置き、哀は工藤邸を出る。

地下室で水中生物のレポートの続きを少し進めてから、哀はそのまま学校に行く事にした。鞄は持つてていたので、阿笠邸を出て、哀は歩美との待ち合わせ場所に行く。

「あいちゃん！おはよー！」

「…ええ、おはよう」

朝から、持ち前の明るさで今日のこの曇天を感じさせない歩美はすごいと思う。いつもだ。彼女は自分にないものをたくさん持っていて、正直少し羨ましい。ここでまた、「私なんか…」と自己嫌悪に陥るのは良くないと分かっていても、だんだんとそうなってしまってきているのを哀は自分で感じた。

「あいちゃん？」

心配そうに自分を覗き込んでいる歩美を視界に捉えて、哀は自分が今登校中であることを思い出す。

「大丈夫よ…昨日あまり疲れなかつただけ」

「この心優しい友人に心配をせまいと、哀は軽くわらつた。

\* \* \* \* \*

キンコーンカーンコーン

課程終了のチャイムが鳴つて、生徒がわらわらと教室を出て行く。次第に運動場が騒がしくなり、どこからトランペットが鳴り始める。

「あいちゃん、まだいたの？」

教室に残つていいたら、不意にひょっこりと歩美が顔を見せた。

「ええ…少し」

哀は読んでいた本をパタリと閉じる。

# 「今日は何語?」

「ギラシヤル」

最近は趣味として、哀は語学の研究も始めたのだ。歩美はいつも哀と共にいるせいで、こういったことには慣れていたりしかった。

「あなたはどうしたの？」

部活は？と哀は尋ねる。中学に入つて歩美はとうとう、以前から憧れていた管弦学部に入部したのだ。

「あ、そういえば。今日はね、パート練習の日だから、楽器」

とに教室を分かれるんだよ

「うう言つて歩美は手に持つたヴィオラケースを掲げた。

「そり。『めんなさい、邪魔だつたわね。遅くなるし、もう帰るわ』

さつきは氣づかなかつたが、歩美の後ろには4、5人の生徒が固まつてゐる。

普段でもあまり喋らない哀は相手からすれば絡みづらいのか、一般的の生徒達からまざじゅやう一線を引かれているらしい。

おかげで平穏無事な学校生活が送れていゐるのだが、それはなんの起伏もない生活だ。

唯一、歩美と同じクラスであることが哀にとっての学校生活の光だった。

「そつか、新一お兄さんいるもんね。ばいばい！」

手を振り返しながら、哀は嘆息した。そう、彼がいるのだ。確かに今日は院が休みだとかなんとか。一昨日あたり、食卓で話していたのを覚えている。

哀はぽつりと言葉をこぼす。

「……博士の所行」つかしく

「アメリカじゃねえか」

「そうなのよね。さすがに工藤君一人置いていくわけにもいかないし」

「たりめえだろ？俺が寂しい」

「にしてもあの料理は生活力なわけ……って、え？」

髪をなびかせ後ろを向いて。そこには

「工藤君？！」

私を驚かせたことに満足したのか、にやつと笑った彼がいた。

「灰原、お前遅えよー。学校終わるの4時だろー。」

「……教室で本読んでたのよ。」

いきなり現れた彼にすこしムッとしたながら、哀は歩き出す。

「携帯もたせるべきか…」

「べつにそのへりご自分で買つわよ」

早足で歩いているつもりなのに、彼の歩調はずっくいで、それなりに自分と早さが変わらないなんて。

「……かわいくねえな」

「結構よ」

いつもどうりだった。朝も顔を合わせていなかつたけど、学校でもあんなに心配したけど、別に平氣だった。

「なあ、おれ腹へつたんだけど」

「まだ6時前よ」

「だつて昼食べてねえし」

「そんなの貴方が悪いんじゃなー」

なんだろう、なんだろうの気持ちは。

「…お前俺の料理の腕知つてそれ言ひつか」

「あれはまさに天才的ね」

胸がざわめいて、苦しくなって、痛い。

「今夜なんだ?」

「何がいい?」

「…クリームシチューー!」

「おひさしひでこいかしら」

何もしていないのに。彼と普通に話しているだけなのに。

「……てんめえ……」

「じゃあカレーね」

昨日の光景がフラッシュバックする。彼の香り、温もり。

「嫌がらせか?」

「今夜は漬け物ね」

私はなにを望んでいるのだろう。つい昨日、捨てたばかりの想い  
がまたあふれてきて。

「『ごめんなさいカレーでいいです』

「で?カレー『で』いい?」

「すいませんカレー『が』いいです」

心が悲鳴をあげる。彼の温もつを切望している。

「じゅあ手伝ってね」

「カレー？」

「雑用」

こんな気持ち、しない。

「… やこですか」

「返事は？」

「… あー」

どうしてこんなにも、彼を求めずしてはいらっしゃらないのだか。



### 3・切望（後書き）

はい、お疲れ様でしたア。+。(ノ、)。+。  
ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます！ちなみに  
長いので、誤字や文章のおかしいところなどありましたら是非コメ  
ント欄でお知らせください！ 評価、感想大歓迎です

#### 4・発熱（前書き）

すみません、リアルお引っ越しでバタバタしていたのでなかなか更新できませんでした（汗）長いですがどうぞ最後までお付き合いくださいーー！

#### 4・発熱

「……さん…灰原さん…」

なに？放つて置いて。

「灰原さん！…」

「…なに？」

哀は不機嫌そうに顔を上げた。途端、中年の女性教師の顔が目の前に現れ、今が授業中であることを思い出す。 しまった、寝てしまつたらしい。

「…すみません」

「灰原、具合悪いのか？顔色良くないぞ」

普段、あまり目立ちたくないと思つてゐる哀は学校で寝てしまつことはない。だから「」この教師も不可解に思つたのだろう。

「いえ…大丈夫です。」

「顔が赤いぞ。一応保健室行つてきなさい。保健委員ー。」

反論の余地も与えられず、あれよあれよといつ間に哀は教室を連れ出されてしまった。

保健委員の女の子は養護担任に事情を説明してから、哀をちらりと見て帰つていく。

「はい、熱はかつてね灰原さん」

体温計を手渡されて、哀はただ流されるがままに熱を計つた。が、「……39度……」

「帰りなさい」

熱は哀自身が想像していたものよりもかなり高い。しかも自覚したせいか体が重くなつてしまつ。

「……寝てれば大丈夫です。。。」「えっと生徒連絡網のファイルはつと……」

哀のあがらいは虚しくも流された。

先生が電話番号を探している間に、

「ちょっと戻つてきます」といつて私は抜け出した。

今日は家に工藤君はいないはずだから、教室に戻つてもまづいことはないだろ?。

教室に入った瞬間だけ一気に視線が集まつたが、先生に「大丈夫か」と聞かれて「はい」と答えただけで、哀が席につくころにはまたいつもの風景に戻つていた。

私の席からは、教室が全部見渡せる。窓際の一一番すみっこ。

アメリカにいたときは、もっと雰囲気が暗かつた。自分自身が幼かつたせいもあるだろうが、陰湿ないじめもあって、楽しくはなかつた。

でも今は違う。

親友ができて、周りを見回せる余裕も生まれて、小さな学生生活だって、それなりに楽しくなってきた。

きっと、工藤君がいたから

哀はもう授業を聞いていなかった。熱が上がったのか、下がったのか、なにも感じなかつた。ただ、思いに耽る。

初めて会つたあの日から、見る世界の色がかわつた。色鮮やかに、輝きだし、自分の存在が見え始めた。  
組織を壊滅させてからも、見た目が変わつていっても、それでもずっとそばにいてくれた人。

私は、救われたんだ。

扉の開く音。聞き慣れた足音。ハスキーボイス。

「灰原！」

振り向くとそこにはいたのは

#### 4・発熱（後書き）

じゅうぶん文を書くところをしていたのに、色々とおかしな箇所があるかもしれません。遠慮なくご指摘下さるとありがとうございました。（――\*）。

## 5・早退

名前を呼ばれ、振り向くとそこにいたのは

「工藤君?！」

春先の暖かい陽気のなか、長袖のスーツだからか、それとも走ってきたからなのか、うつすらと頬が紅潮している。どうして彼が。今日は家にいないはずなのに。

一瞬間を置いて、クラスから黄色い声が上がった。彼が名探偵工藤新一だと気づいたからだろうか。今や新聞に工藤の名前が載らない日はない、それほどに彼は有名なのだと、今さらながら気づかされた。

「先生、従姉妹がお世話になつてます。こいつ、熱あるみたいなんで、帰らせてもらいますね」

私が呆けているあいだに彼はそれだけいうと、横に掛かっていた鞄に卓上の教科書を放り込んで、私の腕をひいていく。また黃色い声が上がったが、工藤君の表情は渋い。私たちは教室を出てからも、無言で歩き続けた。

校門の前には藍色の

「……」

何も言わずに私を車の後部座席に押し込む。自分は運転席に乗

り鮮やかにドアを閉めてアクセルを踏む。

車内の空気が重い。彼をちらとみると、なるほど空気も重くなるはず、無表情の上に無表情を重ねたような、なんとも重苦しい表情だった。

「……今日、大学院」

「早退してきた」

「……」めんなさい」

そういうえば学校の連絡網には保護者の携帯も載せてあるのだ。忘れていたなんて。

「いいから、寝てろ」

今のがめんなさいは、院を早退させてしまったような迷惑をかけてしまったことについて謝ったのだが、彼はそれを相手にもしてくれず、素つ気なく言った。

確かに体がだるくなつてきているのは事実だったので、後部座席に体を倒し、上半身だけ横たえる。次第にまぶたが重くなり、私は意識を飛ばした。



## 5・早退（後書き）

評価、感想、お待ちしております！

## 6・お見舞い

引きつるような喉の痛みで意識が覚醒した。

「んう…」

掠れて、自分のものとは思えない声。

「灰原、口開けろ」

誰…？

言われた通りに薄く唇を開くと、頭が抱え起こされ、なにか柔らかなものが口にあたる気配と同時に、喉に温い水と、小さな固形物が流れ込んできた。

ありがたく飲み干す。それが何度も繰り返され、ようやく目を薄く開いた。

「ぐぢゅぐん…」

「ほら、薬のんだし、いいから寝てろ。それともなんか食いたいもんあるか？」

最後に見たときと同じ、ワイシャツにスースパンツの彼が、目の前にいる。ああそーか、私はあれから倒れたのか。

上手くできたか分からぬけれど、小さく笑って私はまた深い眠

りに落ちていった。

「…………」

「…………！」

「…………」

人の話し声で目が覚めた。どうかしたのだろうか。ふと自分をみるとセーラー服のままで、汗も搔いていたので、とりあえずベットから降りて着替えることにする。

酷い眼眩と頭痛がしていたが、幸い熱は大分下がってきたようで、前ほど辛くはない。

スウェットに一ーアイをはいて、髪を適当に梳かして階下に降りた。

「—藤君、どうしたの？」

病人相手にした不可抗力の口移しからいで、動搖を見せる私ではない。

「おい、お前起きてくんなよ、寝てろつー。」

「あいちゃん！起きて大丈夫なの？あつ、『めんね』めんね、うるさかつた？」

「灰原さん！風邪ですよね、りんごとか食べれませんか？」

「よう、灰原！熱だつてな、なんか食えばそんなもんすぐ直るぞ」

「元太君は基準外だよー！」

「ちよ、歩美お前、何気に酷いな！」

「まあまあ二人とも、灰原さんは病人ですよ」

幼なじみの三人が来ていた。見知った顔を見て酷く安心すると同時に、驚きと、罪悪感もつのる。制服姿なのは学校帰りだからだろうか。

「お前ほんとに起きてきて大丈夫なのかよ、寝てる」

「工藤君はといえば、何故かそつけない。心苦しくなって、思わず歩美に目をむけると、

「新一お兄さんはねー、哀ちゃんが早退したからって、30人以上の男の子がお見舞いに押しかけてきたのが気に入らないんだよー」

にこつと笑いながら歩美。それが嘘だと思いたくはないけれど、本当だとも思い切れない。しかし男子生徒が押しかけてきたというのは事実らしく、元太も光彦も顔を見合わせてうなづいていた。

「あれはすゞかったよなー」

「近所の方も何事かと見にくる程でしたからねー」

「でも新一お兄さん面白かったよねー」

「あ、おこひら歩美ちゃん!」

「もうすっごい怖い笑顔でさ、『うーん俺の家なんだけど、なんか用?』って!」

「みんな一眼散に帰つてこましだからねー」

小さなことだけど、もしかしたらただたんに病人を気遣つただけのことかもしれないけど、それでも充分嬉しかった。哀は思わず小さく笑つた。

「あ、じりてメヒ笑つてんじゃねえ」

「だつて普段冷静なあなたがそんなことしてたなんて、面白くつて」

「つこのやうお

「まーまー、ほり、果物途中で買つてきただんです。みんなで食べましょ!」

「悪かつたわね、円谷君。気遣わせちゃつたみたいで

「気にしないでーみんなあこちゃんのこと心配してたんだもんー」

「あ、じり元太、お前は包丁持つのやめろー。」

「なにこいつてんだよ新一のこいつちゃんーおれだつてこのへりこ出来るぜー。」

「とかいつて元太君、この間リンクゴの皮むきのテストで真っ先に保健室行きだつたじやないですか」

「じゃあ歩美はメロン切つてこよおーつとー。」

みんなが自分のことをこんなにも心配してくれている。まだ微熱が残つてゐるせいか、涙腺は緩く、これだけのことで微妙に涙ぐんでしまつた。

それに気づいてか、工藤君が寄つてくる。

「灰原、お前まだ熱下がつてないだろ。少し寝てろ。」

「大丈夫よ。」

「ほら、いいから行くな。歩美ちゃん達、ちょっとこいつ寝かせてくるからー。」

「わかつたー！じゃあ私たち果物剥いてるから、出来たら呼びに行くねー！」

「あ、ちょっとー。」

無理矢理手を引かれて哀は居間から連れ出された。振りほどけいつとしても振りほどけない彼の力に少し驚く。

「……大丈夫だから」

「嘘付け」

哀の部屋までそのまま連れていかれ、ベッドに無理矢理座らされる。

「……だいじょうぶだつてば」

まずい。自分のだした声は湿っていた。

「何が大丈夫だ、人に散々心配かけといて」

私が何も言えずに俯いていると、ところで、と彼が続けた。

「……俺になんか言つことないの？」

「……めんなさい」

私の口からするりとその言葉が出てきたのは、前々から何度も言おうと心がけつづけていたからだ。しかし彼にはそれが意外だつたのか、少し驚いているみたいで、不謹慎ながらも良い気分だつた。

「……つたく。いつも俺ばかり空回りじゃねえか

「なによ？」

ずい、と私が状況を理解するよりも先に、工藤君が突然顔を近づけてきた。え?と、頭が理解しきった時には既にその唇は離れたあとで、彼は私に向き合つ。

「俺、お前のこと好きだ」

なにその幼稚な小学生みたいな告白文句、とは笑えなかつた。

## 6・お見舞い（後書き）

評価、感想、大歓迎です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9040d/>

---

罰ゲーム

2010年10月11日22時25分発行